

現代フランスのイスラーム嫌悪:ミドルクラスのムスリムの実践から

山下 泰幸

(日本学術振興会特別研究員 PD<同志社大学>)

本講演は、フランスで実施したインタビュー調査の結果に基づき、ミドルクラスのムスリム（イスラーム教徒）の日常における行為や振る舞い、人生選択に関して社会学的な分析を行うことで、現代フランス社会に蔓延するイスラモフォビア（イスラーム嫌悪）の問題について考えることを主題としている。

はじめに講演者個人の留学や研究経歴の振り返りを通して、2015年に発生したいわゆるパリ同時多発テロ事件の影響とその性質について簡単に紹介する。こうした話を導入として、フランス社会におけるイスラーム教徒の人口規模とその定着の歴史について紹介する。19世紀から20世紀にかけてフランスは、啓蒙主義を体現する「文明化の使命」の名のもと、広大な領土を支配する植民地帝国を作り上げた。その結果、北アフリカのマグレブ諸国は長期にわたる植民地支配を受けた。こうした状況は、後に旧宗主国であるフランスの高度経済成長を支える労働力として、北アフリカからの労働移住の大規模な波が生じるその背景となった。今日、フランス社会で暮らすムスリムの大多数は、かつての植民地からの移住者およびその子孫である。

次に、ムスリムたちを取り巻く現代フランスの社会的な状況について、イスラモフォビアという語をキーワードとして整理した。イスラモフォビアとは、オリエンタリズム的な思考様式に基づいて、イスラーム教徒の有する文化的な差異を強調して他者化し、彼女ら彼らを劣位に置いたり排除したりするような文化的レイシズムの一形態と定義できる。フランスにおいては、ムスリムを対象とした根強い就職差別や入居差別、路上でのヘイトクライムの増加や、ムスリムの排除を呼びかける極右政治家の台頭など、イスラモフォビアは悪化の一途をたどっている。また、フランス革命の精神を受け継いだネーションの統合原理である共和主義やライシテ（国家と宗教の分離原則）を毀損する共存不可能な他者としてムスリムたちはしばしば表象され、その排除が正当化される傾向にある。いわゆる2004年の「スカーフ禁止法」をはじめ、ライシテを理由とした種々の法整備やそれに向けた過熱した議論の影響により、ムスリム女性の社会参加が阻害されている。

フランスのムスリムが注目される際には、主に低家賃の高層団地が立ち並ぶ大都市郊外地域に集住するアンダークラスの人びととして描かれることは多い。しかしながらいくつかの統計データからも明らかなように、若年層を中心としてムスリムの高学歴化が進行しており、ミドルクラスに該当すると考えられるムスリムたちも確かに存在している。信仰の強弱やイスラームの教義など、信仰に直結した要素に過度に注目するのではなく、ジェンダーや階級、世代間の差異、学歴や居住地などに目配りした重層的な分析を行うことで、ステレオタイプ化されたムスリムのイメージにとらわれない研究を行うことが求められている。

具体的な事例の分析として本講演では、第一に、アラビア語を継承しておらず、ユダヤ風のファーストネームであることから、庶民階級中心に編成されたムスリム・コミュニティから距離をとってきたことを肯定的に語る女性を取り上げる。第二に、信仰実践の義務を遵守せず、しかしながらそのことを肯定しようとする二人の男性を取り上げ、それぞれ異なる論理を用いながらも信仰を保持し、グローバル企業で働くその柔軟な実践について注目する。第三に、イスラモフォビアをプッシュ要因としながら、さまざまな資本を有効活用して国外に脱出的な移住を行う男性について取り上げる。

以上のような事例からは、イスラモフォビアという形で顕在化するポスト植民地主義的な抑圧をなんとか回避・抵抗しながら、ミドルクラスのムスリムたちが階級を再生産する姿が見て取れた。階級という視座に注目したこうした分析は、ムスリムとそうでない者の差異に過度に注目するのではなく、むしろその共通性を明らかにすることへと繋がる。